

# 阿南 ぶらりまち紀行

続けていくことの難しさを知っているからこそ、今回の試みを契機に、保存活動を活性化したい。伝統というたすきを地域の絆で未来へとつなぐ「原の獅子舞」の新たな挑戦が始まろうとしている。

地域の輝き  
原の獅子舞(那賀川地区)



100年以上の歴史を有しながら、幾度となく存続の危機にさらされてきた伝統の舞が、地域住民の手で息を吹き返そうとしている。

テンテン、ツクツク、テン、ツクツク。三味線と締太鼓の囃子に合わせて獅子が舞い踊る「原の獅子舞」は、その昔、京都の行者が伝えたといわれている原地区の民俗芸能。市の無形民俗文化財にも指定され、八幡神社の秋の例祭では、祭りの華として人々に親しまれた。しかし、後継者不足の悩みは尽きなかった。70年近く獅子舞の保存活動に力を傾注してきた生原保一さん(75歳)は、「小さい頃から民俗芸能の面白さを体感してもらうことで、後継者の育成につながるのでは」と、市の伝統文化復活事業を活用して、昨年12月から体験教室をスタートさせた。集まった17人の受講生は、2月25日の「村おこし伝統文化フェスティバル」出演に向けて練習に励んでいる。

「のたうち」「雲舞い」「谷返り」の3つの舞すべてを踊り終えるのに、1時間以上もかかるという情熱的な舞。先人たちの思いを今に受け継ぐ「原の獅子舞保存会」の皆さんに笑顔が戻っている。

